

静岡平野大谷地区の完新統における津波堆積物の調査

Researches of tsunami deposits from Holocene sediments in the southeast Shizuoka Plain, Shizuoka Prefecture

北村 晃寿^{1*}, 小林 小夏¹, 玉置 周子¹, 藤原 治²

KITAMURA, Akihisa^{1*}, KOBAYASHI, Konatsu¹, TAMAKI, Chikako¹, FUJIWARA, Osamu²

¹ 静岡大学, ² 産総研 活断層・地震研究センター

¹Shizuoka Univ, ²GSJ/AIST

静岡県は、東海地震などによって、たびたび津波の被害を受けたことは、観測記録や古文書記録から知られている。これらの記録を裏付けるとともに、さらに古文書記録以前の津波の堆積物の調査が静岡県各地で行われているが、富士川河口断層帯から御前崎までの駿河湾西海岸における地質調査は、北村ほか(2011)による静岡平野東南部の大谷低地の完新統における津波堆積物の調査だけである。同低地の南側の海岸には浜堤が分布し、東には有度丘陵の山麓斜面があり、西には大谷川が流れている。大谷川は、1980年代の放水路への改変前は蛇行河川だった。大谷川以西の地域は安倍川から供給された砂礫が厚く堆積している。

北村ほか(2011)は、地点1(海岸から約700m, 標高6.96m)と地点2(海岸から約1,050m, 標高7.76m)で、長さ8mのボーリングコアを掘削した。これらのコア試料は、暗青黒色粘土層を主体とし、下位から塊状粘土層(蛇行河川の氾濫原)、平行葉理が発達する粘土層(汽水～内湾泥底)、塊状粘土層(蛇行河川の氾濫原)の順に重なり、最下位の塊状粘土層の上部に鬼界アカホヤ火山灰(暦年代7,300年前)を挟在する。地点1・2ともに上位の塊状粘土層(標高約4-5m)から層厚30cmの分級の良い中粒砂層を発見した。この砂層の基底は浸食面であり、構成する砂粒子は米粒状であり、調査地域の海浜の砂の形態に類似することから、北村ほか(2011)は中粒砂の供給源は海浜であり、津波堆積物の可能性が高いとした。一方、この推定津波堆積物の上位にも、数枚の泥質細粒砂層が挟まれるが、それらの厚さは2-3cmであり、粒子は平板状の形態を示すことから、これらの細粒砂層は河川の洪水堆積物と推定した。演者らは、現在、大谷低地において、さらに5地点からのボーリングコア試料と25か所の縦穴の調査を行っており、その調査状況を報告する。

キーワード: 静岡平野, 完新統, 津波堆積物

Keywords: Shizuoka Plain, Holocene, tsunami deposits